

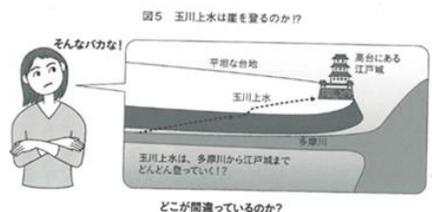
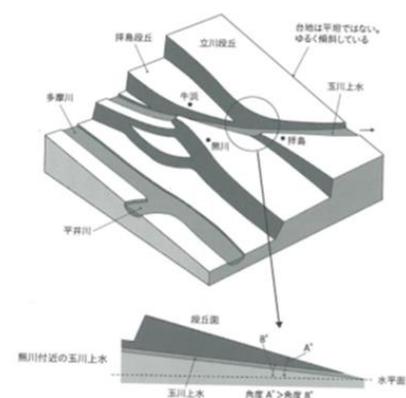
羽村の田んぼと、玉川上水取水堰

7月24日(土)シビルの歴史散歩で、羽村の田んぼと玉川上水取水堰～田村分水までを歩いてきました。これは毎年、年3回やっている歴史散歩の中の定番コース。今年はコロナのため、定員を決めて(定員オーバー、当日参加の方はお断りしました)実施しました。

このコースでは、午前と午後に大きなテーマ(これを見よう、考えよう)が一つずつあります。まず、午前中は、田んぼの水がどこから来るのか?目の前が多摩川ですから「多摩川から…」と出るのですが、そこで質問します「すぐそこの多摩川の水面と田んぼの面、どちらが高いですか?」と。もちろん、川は低いところを流れるので田んぼの方が高い。となると、多摩川からは水が引けませんね。さて?

中車水車小屋カフェでランチをいただき(テイクアウトメニュー)、午後は玉川上水の取水堰に向かいます。

玉川上水は、江戸の飲み水を確保するために、1653年に開削されます。武蔵野台地の東端にある江戸城、その城下町に水を引くためには、その台地よりずっと高いところから足の長い水路を引くしかありません(羽村取水堰標高124m、四谷大木戸32m)。多摩川北岸は階段状の平地が広がる河岸段丘、武蔵野台地はその最上面ですから、取水した玉川上水も途中、何回か、その段丘面(崖)にぶつかり、その上の面に出ようとします。しかし、水は崖を登れない。では、崖にぶつかった玉川上水は、どうなるのか?どうやって上の面に出るのか?これが午後のテーマです。



午前中のテーマの答えは、午後の話の中に。そうです、田んぼの面より高い地点から水路を引けばいいのです。実際に、羽村根がらみ前田んぼの水は、約1km多摩川上流の小作堰の下から取水する車堀によってもたらされます。なお車堀の「車」は水車のこと。その水車の復元したのが中車水車小屋カフェにある水車です。

午後の答えは、ぶつかったら深く掘り込むしかない。でも、平地に見える段丘面も東に向かってわずかずつ低くなっていくので、その掘り方を浅くしていくことで、水路を上の方に引いてゆくの。崖を上がってすぐの新堀橋は、とても深い。ところがだんだんと上水が近づいてくる。実は私たちが下ったのです。